

『サラダ記念日』愛されて30年

「この味がいいね」と君が言ったから七月六日はサラダ記念日
 俵万智さんの歌集『サラダ記念日』が1987年5月に刊行されて30年になる。単行本・文庫合わせて280万部という部数で読み継がれている歌集は、短歌に何をもたらしたのか。

(岡恵里)

三十一文字に口語なお盤石

「嫁さんになれよ」だなんてカンチューハイ二本で言ってしまうといいの
 商品名が登場、若者の恋愛状況を詠んだ歌集がベストセラーになった。

「サラダ記念日」新装版(左)と『文芸別冊 俵万智』II 外山俊樹撮影

昨年、初版とほぼ同じ装丁で新装版が刊行された。「新たな読者に届けたかった」と河出書房新社編集部の高木れい子さん。購買層は約3分の1が初版当時を知らない20代以下だ。



30年を記念し6月に出た『文芸別冊 俵万智』の表紙で、俵さんは『サラダ記念日』と同じ髪形で同じポーズを取る。俵さんと同世代の歌人でエッセイストの

「萩原朔太郎など詩の口語化から70年遅れで短歌口語化の機が到来した。俵さんの文体には、文語の微妙な骨格もあり、(口語の導入を)可能にした。短歌には先行の文体、古典の素養も含めた『形式』があるから、感覚だけでは理解しにくくても新しい良さを評価できた。文語中心世代の短歌に、以後口語が増えた」と分析する。

歌と生きること ずっと並行している

歌はずっと作り続けています。生きることにずっと並行してありました。

短歌は日常の小さな感動や心の揺れに対応できる詩形であり、柔軟に対応してくれるのが魅力。年齢を重ね、住む場所が変わっても、歌に対するスタンスは30年前

俵万智さんに聞く



たわら・まち 1962年生まれ。『サラダ記念日』で現代歌人協会賞、『プーさんの鼻』で若山牧水賞。2011年から暮らした沖縄県の石垣島を離れ、昨年宮崎県在住。

と変わりません。付け加えることがあるとすれば、青春や恋愛同様、子育てと短歌はすぐ相性がいいということでしょうか。子どもは月単位で変わっていく。その更新の様子を表現するにも短歌は合っている。何度でも呼ばれておりぬ雨の午後「かーかん」「はい」「かーかん」「はい」恋愛の歌は見せ方を考えたり、盛りつけやソースに凝ったりしなければアピールできないが、子どもの歌は「刺し身」で出せる。鮮度が味になるんです。当時、カタカナ語が多いという表面的な批判もありましたが、大

筋認めてもらった安心感がありました。その後の展開を見ても、短歌が口語抜きではもちこたえられない時期に来ていたのでは。五七五七七だけが決まりなんだよ、と最初に佐佐木先生に言われた。本当にいいリズムだと思えます。はみ出すためにはみ出して、も、ずっと続いてきたものに負けてしまう。この定型は自分の言葉に力を与えるもの。はみ出す理由を今も私は見つけられない。歌は誰かに頼まれて作るものでもない。歌人に限らず、何かでありつづけるのはたいへんですが、新作を楽しむにされる歌人でありたい。